

○紅花屏風 青山永耕

紙本着色 屏風 六曲一双

各一五六・五×三六六・〇

江戸時代（明治時代）

山寺芭蕉記念館

山形県指定有形文化財（一九六二）

江戸時代における最上山形の特産品紅花の栽培から、紅花染めの原料の加工製造や流通までを写実的に描いた屏風。最上紅花は、良質の染料として京西陣の染織物に利用され、最上千駄のことばのとおり大量の紅餅が京都や大阪に送られた。

画家の青山永耕（一八一七～七九）は、現在の山形県東根市六田の庄屋青山家に生まれ、幼名は揆一。若くして絵を好み、上山藩の絵師丸野清耕の門に入り、のち養子となった。清耕の没後、二十九歳で江戸に出て、奥絵師中橋狩野家の永恵（えいとく）立信に師事し、後に狩野の姓を許され、明治のはじめに狩野永耕応信と号した。

この図は永耕の幕末の作である。

東根六田はかつて紅花生産の中心地であった。右隻から、豊作を祈る春祭り、種蒔き、花摘み、花踏み、花寝せを経て、紅餅のできるまでを人物の表情豊かに描いている。

左隻は、紅餅の出荷作業や敦賀の港に入る北前舟を描いている。船帆には山形の荷主問屋の屋号が見えるが、これは永耕が想像で描いたものである。最後は京都の紅花問屋の店先と取引の場面で、歴史・産業資料としても貴重である。

一九九一年に、左隻の船団中央の帆印にもある、丸谷長谷川家の当主吉内氏から山形市に寄贈された。

参考文献

「山形の屏風絵展」山形県立博物館発行（平成十三年十月五日）

「山形県の文化財」山形県教育委員会発行（平成十四年三月二九日）